

厲氏 1958年の契丹小字研究  
—漢語音を利用した先駆的研究として—

吉池孝一

1. 序言

契丹文字研究小組 1977 で公表され清格爾泰・劉鳳翥等 1985 に結実した契丹小字の研究は期を画する成果であり解読を大きく前進させたとされる<sup>1</sup>。この研究は、先ず契丹小字で表記された漢語音によって幾つかの小字の音価を定め、次いでその音価を手がかりとして次々と芋づる式に他の小字の音価を定めていくという手法をとった。もともと、どのような画期的な研究であっても、それを準備する前段階とも称し得る研究があるにちがいない。小稿はその点を確認すべく進めている作業の一部である。以下に山路廣明 1943 と厲鼎燿 1958 を取り上げ検討する。なお、契丹小字文はハングルのように原字(音を有する最小単位)を左右上下に綴るが小稿ではそれを便宜的に横一列に配して記すことにする<sup>2</sup>。

2. 山路廣明 1943

契丹文中の漢字音に着目した早い時期の研究には山路廣明 1943 がある。山路氏は、宣懿皇后哀冊文の「文」に相当する **𐰺𐰽** を **𐰺** wē および **𐰽** ên とし両者が相合して wên(wē-ên) となり「文」の漢字音をあらわすこと、また仁懿皇后哀冊の「仁」に相当する **𐰺𐰾** を **𐰺** ji および **𐰾** in とし両者が相合して jin(ji-in) となり「仁」の漢字音をあらわすことに言及し、「契丹語の中には斯様な構造を有して漢語・漢字音を表はすものが可成り多い。」(321 頁) と喝破した。この論文について長田夏樹 1984 は「契丹小字解読の出発点とすることのできる着想であると言えよう。」(21 頁) と高く評価する。たしかに漢字音の存在に着目した功績は少なくないが、**𐰺𐰽** および **𐰺𐰾** を漢字音とする根拠を示さないこと、漢字音を手がかりに求め得た契丹小字の音価を利用して芋づる式に他の小字の音価を定めていくというような研究に発展させることはなかったことからみて、契丹文字研究小組 1977 の手法に直接に繋がる研究とは見なし難い。契丹文字研究小組 1977 に直接に繋がるものとしては厲鼎燿 1958 を挙げることができる。

---

<sup>1</sup> 西田龍雄 1982 は「契丹文字研究班は、新しい時期を画する研究を発表した」(166 頁) とする。

<sup>2</sup> 本稿で使用した契丹小字のフォントは、内モンゴル大学の契丹文字再研究課題組と内モンゴル蒙科立軟件有限責任会社が制作したものによった。使用を御許可くださった関係諸氏に感謝申し上げます。

### 3. 厲鼎燿 1958

厲鼎燿氏著「《漢語拼音方案》幫助了我考釋契丹文字」は『語文知識』第 72 期(1958 年 4 月号)に掲載されたものであり契丹文字の専論ではなく分量もすくない。小さな論である。しかしながら契丹小字研究の方法という面からみるならば、その意義は決して小さなものではない。以下に関係部分を引用しつつ議論をすすめる。

■我們揚州方言里，“欣”、“興”二字，不能分別，都讀 xin。因此在考釋契丹文這兩個字的對譯時，便模模糊糊的過去了。从《語文知識》1958 年 1 月号里，看到《常用漢字拼音表》是用拉丁字母拼注普通話標準音的，我覺得極其有用，是我們學習普通話的老師。我从這表中 63 頁左欄里，学会“欣”是 xin，“興”是 xing，兩個字的音不同。因之我才辨識出：過去所已考出的契丹文“興”作“𠂇𠂇𠂇”，“欣”作“𠂇𠂇𠂇”，顯然，兩個字下半不同的部分，正是“-ng”和“-n”的分別。因此決定：“𠂇”=ng，“𠂇”=n；同時“𠂇”=x，“𠂇”=i。契丹文“興”“欣”二字在這里，是借用漢字，加以音譯。

這個發現，連類解決了許多契丹字的考釋。(41 頁)

厲氏は、まず興(拼音表記は xing)に対応する契丹小字を“𠂇𠂇𠂇”とし、欣(拼音表記は xin)に対応する契丹小字を“𠂇𠂇𠂇”とする。厲氏は明言こそしないが、小字と漢字がこのような対応をみせるからには、表音文字の“𠂇𠂇𠂇”と“𠂇𠂇𠂇”は漢字の興と欣の意味に相当する契丹語を表記したものではなく、興と欣の漢字音を表記したものに相違ないと考えたはずである。この考えは、興(拼音表記は xing) = “𠂇𠂇𠂇” および欣(拼音表記は xin) = “𠂇𠂇𠂇”という前提が正しければ有効である。この前提より出発して、𠂇=ng、𠂇=n、𠂇=x、𠂇=i とする。さて、興 = “𠂇𠂇𠂇” および欣 = “𠂇𠂇𠂇”という前提は羅福成氏の釈文に拠ったものに相違ない。『遼陵石刻集録』に掲載された「興宗皇帝哀册文羅福成釋文」では、𠂇𠂇𠂇-𠂇𠂇に興宗を当てる。この𠂇𠂇𠂇-𠂇𠂇に興宗を当てる部分は現在でも認められており有効である。他方の欣 = “𠂇𠂇𠂇”は大金皇弟都統經略郎君行記(郎君行記と略称する)の釈文によるのであろう。郎君行記は契丹小字文とその漢訳が合璧となった碑文であり、それを研究するにおいて先ずは原文に訳文を対応させる作業が必要となる。羅福成氏は“𠂇𠂇𠂇”に漢訳の“不勝欣懌(欣懌に勝えず。非常に喜んで)、與醴陽太守酣飲而歸(醴陽太守と共に心ゆくまで酒を飲んで歸った)”の“欣懌”を当てる。しかしながら、この部分については契丹小字と漢訳の対応を正しいとする根拠を見つけ出すのは困難である。この部分につき清格爾泰 2002 の研究成果を見ると未解読の個所として残されている<sup>3</sup>。このような不確と言わざるを得ない前提より出発したため、𠂇=ng、𠂇=n、𠂇=

<sup>3</sup> 清格爾泰 2002 の 8 頁参照。清格爾泰 2010 の 388 頁所収。

x、**𠂔**=i という音価のうち、**𠂔**=n には問題が残ってしまった。なお、興や欣の声母を表わす漢語拼音方案の x は舌面摩擦音の [ç] であり、これらは遼代では喉の摩擦音 [x] であつたはずであるから、漢語拼音方案の x をそのまま契丹小字の音価として用いることはできない、ということは言うまでもないであろう。問題は幾つかあるけれども「契丹文“興”“欣”二字在这里, 是借用漢字, 加以音譯。／【段落変え】 這個發現, 連類解決了許多契丹字的考釋」と述べるころは傾聴に価する。この「興と欣が契丹小字で表記された漢字音であるという発見を利用するならば、芋ずる式に様々な契丹文字解読上の問題を解決することができる」という発言は契丹小字研究の方法を述べたものとみなすことができよう。次いで厲氏は、以下のように、求め得た **𠂔**=i という音価を利用して契丹文字解読上の問題の解決に乗り出すのである。

■就“**𠂔**”=i 講: 契丹文“懿”字作“**𠂔𠂔**”, 顯然是兩個“i”, 也是借用漢字, 加以音譯。我們知道滿洲文里, 借用漢字的占三分之一; 女真文字根拠《女真譯語》, 借用漢字加以音譯的也不少。現在契丹文里也有這樣多是不是怪的。(41 頁)

『遼陵石刻集録』以来、**𠂔𠂔**-**𠂔𠂔**-**𠂔𠂔**-**𠂔**には漢語の宣懿皇后が当てられてきた。このうち **𠂔𠂔** は、先の結論である“**𠂔**”=i を利用するならば、ii であり懿の漢語音に当たるといふ。懿=**𠂔𠂔** でありこれが漢語音であるということはその後の研究成果とも一致する。次いで「滿洲文や女真文の中に借用漢語が多く用いられていることからみて契丹文のなかに多くの借用漢語があつても怪しむに足りない」とする点も肯定できる発言である。さらに厲氏は、求め得た **𠂔**=ng という音価を利用して別の語の解読を試みる。

■就“**𠂔**”=ng 講: 和“興宗”作“**𠂔𠂔𠂔**-**𠂔**”一樣, 契丹文里有个“**𠂔𠂔**-**𠂔**”。“**𠂔𠂔**”字右旁是 ng, 左旁是形近漢文“几”字的“**𠂔**”讀音和漢文“几”字相同, 便是 ji(上声), 所以“**𠂔𠂔**”=jing(上声), 那当然是《遼史》里“景宗”的“景”了。(42 頁)

“**𠂔𠂔**-**𠂔**”は道宗哀册の 13 行第 1-2 字に出てくる。『遼陵石刻集録』に掲載された「道宗皇帝哀册文 陳 思孛寫 羅福成釋文」では“**𠂔**”に宗を当てるけれども“**𠂔𠂔**”の方は空欄となっている。こちらの釈読は不可ということであろう。厲氏は、漢字“几”と契丹小字“**𠂔**”の字形の類似により両者は同音であると推定し“**𠂔**”=ji とし、“**𠂔**”=ng と合して“**𠂔𠂔**”=jing=景とする。このように“**𠂔𠂔**-**𠂔**”を景宗とする読みは後の研究成果とも一致する。しかしながら、漢字と契丹小字の字形の類似を根拠として契丹文字に読音を与える手法は確かなものとは言い難く、傍証とするか或いは他の語を用いて検証した後でないといふ性質のものであり、このような手法の援用については慎重でなければならない。なお、厲氏は“**𠂔𠂔**-**𠂔**”の最後の文字を“**𠂔**”とするが、実際の

字形は“𡗗”であり“𡗗”とは異なる。この点については次の段で言及する。なお、凡の声母を表わす漢語拼音方案の ji の j は舌面破擦音の [tɕ] であり、これは遼代では喉の破裂音 [k] であったはずであるから、漢語拼音方案の j をそのまま契丹小字の音価として用いることはできない、ということは言うまでもないであろう。最後に厲氏は、求め得た 𡗗 = n という音価を利用して別の語の解説を試みる。

■就“𡗗” = n 講：“宗”字契丹文作“𡗗𡗗”。右旁是“n”已无疑義。左旁是 z, 可以推知。所以“𡗗” = z, 便也可決定。

当然這裡便附帶發現一個問題：“宗”字現代漢語普通話讀 zong, 揚州一帶方言讀 zon。現在契丹文里借用漢字, 也作 zon 音, 不作 zong 音, 可見是過渡時期 -n 収声于舌尖鼻音的字, 逐漸衍變分化成 -ng 収声于舌根鼻音的字, 但還不够普遍。所以契丹文里的“宗”, 便是還在我們北方話未變 zon 為 zong 的五代北宋時期, 被契丹人学了去的。(42 頁)

厲氏によると、興宗や景宗などの宗は“𡗗𡗗”と記されるという。先に“𡗗” = n としたことから、“𡗗” = z と推定し、“𡗗𡗗” z-n で宗の漢字音を表わすとみる。宗の韻尾が -ng ではなく -n であるのは当時の漢語音に拠ったものとする。先に欣 = “𡗗𡗗𡗗” は確実な対応例ではないとしたが、これが仮に成り立つとしても、宗 = “𡗗𡗗” の第二字目は実際には“𡗗”ではなく“𡗗”であり、宗 = “𡗗𡗗” でなければならないから、この論が成り立たったためには先ず“𡗗” = “𡗗”を証明しなければならないのだが、それはなされていない。もっとも、欣 = “𡗗𡗗𡗗”を認めてそれを活かすとなったならば、“𡗗” = n、“𡗗” = up とすることも不可能ではない。参考までに言い添えておくが、この“𡗗”について清格爾泰 2010 は宗や奉などの漢字音との対応により“𡗗” = up とする。しかしながら“𡗗”の方の音価は不明とする<sup>4</sup>。これは現段階では穏当なところであろう。次ぎに、宗などの漢字音であるが、五代北宋時期の北方漢語音の宗などの [-up] が [-un] であったとする厲氏の想定は成立し難いけれども、契丹訛りの漢語音としてみるならば [-un] であったとしてもこれもまた不可能ではないと私は考える。もっとも、宗 = “𡗗𡗗” z-n であるとしたならば、母音が表記されないことになる。このような点をどのように考えるかということについては表明されない。

#### 4. 結語

厲氏の契丹小字の解説にあつては、興(拼音表記は xing) = “𡗗𡗗𡗗”と欣(拼音表記は xin) = “𡗗𡗗𡗗”という前提のうち、後者は不確かな例と言わざるを得ない。このような

<sup>4</sup> 清格爾泰 2010 の 422 頁参照。

不確かな前提より出発したため、“**𡗗**” = n というような、現段階では肯定も否定もし得ない音価を導き出すこととなった。また“**𡗗**”を“**𡗗**”と混同したために“**𡗗**” = “**𡗗**” = n となり、最終的には五代北宋時期の北方漢語音における宗の韻尾は -n であったとする首肯しがたい結論に至った。しかしながら、「契丹小字で表記された漢語音によって幾つかの小字の音価を定め、次いでその音価を手がかりとして次々と芋づる式に他の小字の音価を定めていく」という手法が厲氏によって試みられたということ自体は、契丹小字の解読史にあって期を画する出来事として評価することができよう。厲鼎燿 1958 の場合、残念ながら、出発点が確実な借用漢語とは言い難いものであった。他方の契丹文字研究小組 1977 という研究について、方法論という面に限定していうならば、厲鼎燿 1958 の手法にのっとり確実な借用漢語から出発した研究として研究史のなかに位置づけることができる。求め得た音価を他の用例によって繰り返し検証しその蓋然性を高めたということも周知のことであろう。

#### 参考文献(発行年順)

金毓黻 1934. 『遼陵石刻集録』六卷。

山路廣明 1943. 「契丹大字考」, 『浮田和民博士記念 史學論文集』(早稲田大学史学会編纂) 東京: 六甲書房、313-322 頁。

厲鼎燿 1958. 「《漢語拼音方案》帮助了我考釋契丹文字」, 『語文知識』第 72 期 1958 年 4 月号, 41-42 頁。

中国社会科学院民族研究所・内蒙古大學蒙古語文研究室契丹文字研究小組 1977. 「關於契丹小字研究」, 『內蒙古大學學報』1977 年第 4 期契丹小字研究專号, 全 97 頁。

西田龍雄 1982. 『アジアの未解読文字』東京: 大修館書店。

長田夏樹 1984. 「契丹語解読方法論序説」, 『内陸アジア言語の研究 I』神戸市外国語大学, 1-49 頁。『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学—中国諸民族の言語・契丹女真碑文釈・民俗言語学試論・邪馬台国の言語—』京都市: ナカニシヤ出版, 634-687 頁に再録。

清格爾泰・劉鳳翥・陳乃雄・于宝麟・邢復礼 1985. 『契丹小字研究』北京: 中国社会科学出版社。

清格爾泰 2002. 『契丹小字釋読問題』東京: 国立亞非語言文化研究所。

清格爾泰 2010. 『清格爾泰文集 第 5 卷』赤峰市: 內蒙古出版集團 內蒙古科學技術出版社。